

現地を訪問して想うこと

1974年 産業社会学部卒

川島 芳雄

現地の校友から直接近況を聞くことができるという企画に魅かれて、今回初めて参加させていただきました。往路復路で見た都市部の印象は、地震の規模に比べて残っている建物の損壊が少ないように感じました。18年前に神戸市で被災したときの経験では、街の中心部は大きなビルが横倒しとなり、地下を走る電車の上の道路は陥没して地下トンネルを塞ぎ、高速道路は足元からへし折れて横転しているという光景が広がっていました。そういうイメージを持っていたので、実際に東北の主要都市を見たときは・2年半経っているとはいえ、その整然さにむしろ意外さを感じました。

一方、今回案内していただいた海岸近くの津波が襲来した地域には、今でも言葉を失うような光景がありました。それは洗いざらいというイメージそのものでした。その地域で津波の語り部として活動されている人の話を聞いていると・心の底に今でも渦巻いている無念さと、その一方で同じような悲劇を繰り返させたくないという一徹の思いが痛い程に伝わってきました。

夜の交流会では、現地で街の復興に関わっておられる地元行政機関の職員の方と席が隣になり、日常的な業務の話などを聞かせていただきました。そこでは・目々の地道な仕事の積み上げこそが長い目で見れば復興に至る道だということを・改めて感じさせられました。

現地の人たちの話を聞く中で特に印象に残ったのは・無念さと悲しみを伴う運命を受け入れながらも、運命にはつぶされないという東北人のしなやかな強さのようなものでした。

もう一つの印象としては、津波による被害を受けなかった都市主要部は、以前と全く変わらずに活気があるということです。私たちが昔からよく知っている東北特有の素朴で陽気な街がそのままそこにあって、私たちが今まで通り普通に迎え入れていることです。